HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北アメリカ北部北西海岸言語領域とその周辺について
Author(s)	堀, 博文
Description	特別企画：追悼 宮岡伯人先生
Citation	北方言語研究, 16, 25-44
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99331
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99331
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_Hori.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 16: 25-44（日本北方言語学会 2026）

【特別企画：追悼 宮岡伯人先生】

北アメリカ北部北西海岸言語領域とその周辺について[1]

堀　博 文
（静岡大学）

キーワード：北部北西海岸言語領域、中部北西海岸言語領域、言語接触、無差別的数標示、迂言的所有構造

1. はじめに

系統的に多様な言語が錯綜する北アメリカ北西海岸地域の中でも、その北部のアリュート語 (Aleut)[2]（アメリカ合衆国アラスカ州）、イーヤック語 (Eyak)（同）、ハイダ語 (Haida)（同州とカナダのブリティッシュ・コロンビア州）の間に特異な文法現象がみられるとして、それらの言語が「北部北西海岸 (Northern Northwest Coast) 言語領域」をなすとする説が Leer (1991) によって提唱された。本稿は、Leer (1991) で取り上げられているそれらの文法現象を概観し、その言語領域が形成されるに至った歴史的な背景を検証するとともに、北西海岸地域の社会特性と言語接触の関係、更に、北米大陸への人類の移住についても説き及ぶことを目的とする。もとより、ここに述べることのあらかたは、筆者個人の考察に基づくものではなく、関連する先行の所論をまとめたに過ぎないことを予め断っておく。

２．北部北西海岸言語領域

Leer (1991) が北部北西海岸言語領域に属すると見做すのは、主にアリュート語（エスキモー・アリュート語族）、イーヤック語（ナ・デネ大語族）、ハイダ語（系統不明[3]）である。その根拠となるいくつかの特徴のうち、まず強いもの、すなわち、類型的に稀で、少数の言語にしかみられないものとして①唇音の欠如（あるいは少なさ）、②無差別的数標示、③迂言的所有構造をあげており、特に、イーヤック語とハイダ語は②と③を共有する点において、その言語領域の中核をなすと見做される。更に、アラスカ州で話されるトリンギット語 (Tlingit)（ナ・デネ大語族）が①と（微弱ながら）②を共有することから、この領域の周辺に位置づけられる。更に、①のみを共有するアサバスカ語族 (Athabaskan) がこの領域の最も外側に位置するという関係になっている。

[1] 本稿は、堀・笹間（2024）の内容のうち、主に堀が担当した北アメリカ北部北西海岸言語領域に関する部分を補足しながら、一部を敷衍したものである。本稿をなすにあたって、呉人惠先生（北海道立北方民族博物館）より貴重なご意見を賜った。記して感謝の意を表したい。本稿に含まれ得る誤解、誤謬はすべて堀の責に帰せられることは言うまでもない。本稿は、科研費 22H00657，23H00627，25K04064 の援助による研究成果の一部である。

[2] 以下、本稿の言語名の名称と表記は、宮岡 (1992a) に従う。

[3] ハイダ語の系統については、Sapir (1915) に始まり、更に最近では Enrico (2004) など、ナ・デネ大語族に属するという説がいくつかあるものの、いずれも十分な支持を得ているわけではなく、孤立言語であるとするのが大方の見解である（詳しくは堀 2022 参照）。

本節では、形態統語的特徴としてあげられている②と③がこれらの言語においてどのように現われているかを概観する。いずれも Leer (1991) がいうところの「無差別性 promiscuity」に関わる現象である。

2.1 無差別的数標示

ハイダ語とイーヤック語には、名詞句そのものに単数や複数を示す標識がなく、それらの区別がなされるのは 1 人称と 2 人称の代名詞[4]に限られている。しかし、3 人称代名詞には、単数と複数の区別がなく、その複数性は、動詞に付加される要素によって示される。その際、動詞に付加されるその要素は、どのような文法役割であれ、同一の節に現われる限り、「無差別的 promiscuous」（Leer 1991）に 3 人称代名詞の複数性を標示することができる。ハイダ語においては、次の例にみるように、動詞に付加される接尾辞 *-ɢu* (~ *-ɢw*)（以下、本節の例では太字で示す）によって、同一の節に現われる 3 人称代名詞（自立形 *'laa* と付属形 *'lə=*）が自動詞の主語（(1)）、他動詞の主語（(2)）、他動詞の目的語（(3)）（それぞれ下線で示す）のいずれであっても、その複数性が示される[5]。

(1) gəm ’laa xyaał-**ɢu**-gəŋ-gən.
NEG 3 dance-3PL-NEG-PST
「彼（女）らは踊らなかった」
Cf. gəm ’laa xyaał-gəŋ-gən.「彼（女）は踊らなかった」

(2) gixyaaŋʔu kaljuu ’laa dəŋgigiŋ-**ɢu**.
cloth big 3 carry-3PL
「彼女たちは大きな布を運んでいた」
Cf. gixyaaŋʔu kaljuu ’laa dəŋgigiŋ.「彼女は大きな布を運んでいた」

(3) t’aləŋ ’lə=qiŋ-**ɢu**-gən.
we 3=see-3PL-PST
「私たちは彼（女）らを見た」
Cf. t’aləŋ ’lə=qiŋ-gən.「私たちは彼（女）を見た」

この動詞接尾辞 *-ɢu* の無差別性は、他動詞節の主語や目的語などの文法役割にとどまらず、次の例のように、後置詞の目的語（(4)）や所有句の所有者（(5)）となる 3 人称代名詞の複数性を示すことからも窺える。

---

[4] 以下、人称代名詞には、自立的なそれだけでなく、人称を示す動詞接辞や接語も含まれる。
[5] 以下のハイダ語例のうち、出典が明記されていないものは筆者自身の調査で得られたスキドゲット方言のものである（Leer 1991 であげられているのは、主にアラスカ方言である）。資料を提供くださった DM さん、ER さん、WP さんに感謝申し上げたい。グロスで用いられる略号は次の通りである。COMP: complement, EVD: evidential, INTER: interrogative, NEG: negative, NPST: nonpast, PL: plural, POSS: possessive, PST: past, REL: relative, REP: repetitive, SG: singular, 1: 1st person, 2: 2nd person, 3: 3rd person。尚、ハイダ語の 3 人称代名詞は、指示対象の性別による区別をしないので、文脈から明らかな場合を除き、日本語の訳文では「彼（女）」とする。

(4) ’laa=gi　yaanaŋaa-ciił-**gw**-aa-s=gyaan....
　3=to　be.foggy-become-3PL-EVD-NPST=when
「彼らに対して霧がかかってきた時…」(Swanton 1905: 37)[6]

(5) ’laa-ca　sq’inaan-ł**ə-gu**-gaaŋ-aa-ŋ　ʔwan　suu-ga.
　3-POSS　whine-upward-3PL-REP-EVD-COMP　3PL[7]　say-NPST
「彼らの（犬）は、上に向かって鼻を鳴らしたという」(Swanton 1905: 37)

動詞接尾辞 *-gu* は、同じ節に 3 人称代名詞が現われれば、無差別的にその複数性を示すことができるので、同じ節に二つ以上の 3 人称代名詞がある場合は、複数性がその一方あるいは両方と結びつくことによって、次の例のように、曖昧な文となってしまう。

(6) ’laa　’laa　qiŋ-**gu**-gən.
　3　3　see-3PL-PST
「彼（女）たち$_i$は彼（女）たち$_j$を見た[8]／彼（女）は彼（女）たちを見た／彼（女）たちは彼（女）を見た」

これらの例にみられるように、ハイダ語の 3 人称代名詞は、形式的に単数と複数の区別がなく、その複数性が動詞に付加される接尾辞で示される点、更に、その接尾辞が、同じ節に現われる 3 人称代名詞と無差別的に結びつき得る点が特異であるといえる。

このような特異性は、イーヤック語とアリュート語にもみられる。イーヤック語では、動詞に付加される接頭辞によって主語と目的語の人称と数が標示されるが（Krauss 2025: 293）、3 人称はゼロ標識である（下記の (7) を参照）。しかし、3 人称の指示対象が人間である場合には、単数であれば *=ĩh*（(8)）、複数であれば *=inu:*（(9)）という後接語によって数の区別がなされる（例はいずれも Leer 1991: 165 による[9]）。

(7) χəwa:　ʃəʃehł.
　dog　3.killed.3
「それが犬を殺した／犬がそれを殺した」

[6] Swanton (1905) から引用した資料の表記と分析は筆者による。分析に際しては、Enrico (2005) を適宜参照した。
[7] ハイダ語には、3 人称代名詞として、ここで扱う *’laa*（自立形）と *’lə=*（付属形）以外に、不定の 3 人称代名詞がいくつかある。この例における *ʔwan* はそのような 3 人称複数代名詞の一つである。この代名詞が用いられる場合、その節の述語の動詞 *suu* ‘say’ には、複数性を示す *-gu* は付かない。
[8] この場合の「彼（女）たち」の指示対象はそれぞれ別である（以下の例でも同様）。
[9] 表記は国際音声字母に改め、グロスの一部を加えた（以下のアリュート語も同様）。

(8) χəwa: ʃəʃehɬ**=īh**.
dog 3.killed.3=human.SG
「彼（女）が犬を殺した／犬が彼（女）を殺した」[10]

(9) χəwa: ʃəʃehɬ**=inu**:.
dog 3.killed.3=human.PL
「彼（女）らが犬を殺した／犬が彼（女）らを殺した」

(8) では単数の人間を示す *=īh* が、また (9) では複数の人間を示す *=inu:* がゼロ標示の 3 人称の主語と目的語のいずれとも結びつくゆえに、それぞれ二通りの解釈が生じる。すなわち、イーヤック語においても、ハイダ語の例でみたように、それらの数標識が主語と目的語のいずれとも結びつきうる無差別性が認められるといえる。

更に、その無差別性は、後置詞句の目的語として現われる 3 人称代名詞にも及ぶことが、次の例において認められる。

(10) χəwa: ʔu=χaʔ ʃəʃəhɬ**=inu**:.
dog 3=unto 3.killed.3=human.PL
「彼（女）が彼（女）らの犬を殺した／彼（女）らが彼（女）らの犬を殺した／彼（女）らの犬が彼（女）を殺した／彼（女）の犬が彼（女）らを殺した／彼（女）らの犬が彼（女）らを殺した」(Leer 1991: 165)

このように幾通りもの解釈が可能なのは、人間の複数性を示す *=inu:*が、主語、目的語だけでなく、後置詞 *=χaʔ* 'onto' の目的語となっている 3 人称代名詞 *ʔu* と結びつくことがあるからである。尚、その後置詞句は、前の名詞 *χəwa:* 'dog'の意味上の所有者を表わしている（2.2 参照）。

次に、アリュート語をみてみると、アリュート語では、主語の人称と数が動詞に付加される屈折接尾辞で示されるが、3 人称の場合に示されるのはその数だけである。次の例において動詞に付加された *-χ*[11]は、主語 *Pi:tʁa*「ピーター」と一致し、主語が単数であることを表わしている。

(11) Pi:tʁa-χ tiŋ kiðu-ku-**χ**.
Peter-SG 1SG help-PRES-SG
「ピーターは私を手伝っている」(Leer 1991: 169)

[10] Leer (1991: 165) に付された英訳では、'a dog killed them' とあるが、'a dog killed him/her' の誤りであろう。
[11] アリュート語では、3 人称以外の人称と数は、屈折接尾辞によって示されるが、3 人称の場合は数しか示されない。従って、グロスでは、Leer (1991: 168) に倣って、単に SG（単数）と PL（複数）と表記する。

アリュート語では 3 人称の自立的な人称代名詞はゼロ形式であり、従って、数の区別はなく、専ら動詞に付加される屈折接尾辞で単数と複数の区別が示される。例えば、次の (12) において、目的語として現われている 3 人称代名詞（ø で表わす）の数は、屈折接尾辞 *-u* によって示されている。

(12) Pi:tʁa-m　　ø　　kiðu-ku-**u**.
　　Peter-REL.SG[12]　3　　help-PRES-/SG[13]
「ピーターは彼（女）を手伝っている」(Leer 1991: 170)

これに対し、3 人称代名詞 ø が複数であることを示すには、屈折接尾辞 *-ŋis* が用いられる。次の例では、屈折接尾辞の *-ŋis* は、目的語となっている 3 人称代名詞の複数性を示している。

(13) Pi:tʁa-m　　ø　　kiðu-ku-**ŋis**.
　　Peter-REL.SG　3　　help-PRES-/PL
「ピーターが彼（女）たちを手伝っている」(Leer 1991: 170)

この屈折接尾辞 *-ŋis* は、3 人称代名詞が主語の場合でも、同様にその複数性を示す。

(14) ø　hla-s　　kiðu-ku-**ŋis**.
　　3　boy-PL　　help-PRES-PL/
「彼（女）たちが少年たちを手伝っている」(Sadock 2000: 126)[14]

すなわち、屈折接尾辞 *-ŋis* は、3 人称代名詞の文法役割の如何を問わず、その複数性を示すことができるので、主語と目的語がともに 3 人称代名詞の場合は、次のような曖昧な文となってしまう（例は Leer 1991: 171 による）。

(15) ø　ø　kiðu-ku-**ŋis**.
　　3　3　help-PRES-/PL[15]
「彼（女）が彼（女）らを助けている／彼（女）らが彼（女）・彼（女）らを助けている」
　　Cf. ø　ø　kiðu-ku-**u**.「彼（女）が彼（女）を助けている」（*-u*: SG (12)）

---

[12] 目的語が 3 人称代名詞（すなわち ø）である場合、主語（ここでは *Pi:tʁa*「ピーター」）は関係格で標示される。
[13] スラッシュの左側にあるのは主語の人称と数であり、右側にあるのは ø（すなわち、3 人称代名詞）の数であるが、3 人称の屈折接尾辞は、1 つの名詞項の数しか表わすことができないので、Leer (1991: 170) は /SG のように表記している（複数の場合は、(13) などの例を参照）。
[14] グロスは、Leer (1991) に倣って改変した。
[15] Leer (1991: 171) によれば、グロスでは /PL としているが、実際には主語となっている 3 人称代名詞の数も標示しうるので、SG/PL ~ PL/SG ~ PL/PL の解釈がある。

(15) のような曖昧性が生じるのは、動詞に付加される 3 人称複数を表わす接尾辞が、同じ節に現われる、如何なる 3 人称代名詞（実際は ∅）とも結びつきうる無差別性を有するからである。ちなみに、このような曖昧性は、普通名詞が関わってくる節では生じることがない。なぜなら、普通名詞そのものに数の標識が付くからである（(11) から (14) を参照）。

更に、アリュート語でも、所有句において所有者が 3 人称代名詞の場合は、動詞に付く接尾辞がその数を示す。

(16) Piːtʁa-m ∅ aða-ŋis kiðu-ku-**ŋis**.
Peter-SG.REL 3 father-/PL help-PRES-/PL
「ピーターは彼（女）らの父親を助けている」(Leer 1991: 173)

動詞に付加された接尾辞 *-ŋis* は、所有句「彼（女）らの父親」の所有者である 3 人称代名詞（実際は ∅）が複数であることを示している。ちなみに、この例におけるように、アリュート語では、被所有者名詞（この場合は *aða*「父親」）にも同じ接尾辞が付加され、所有者の数が二重に示される。

以上みてきたように、ハイダ語、イーヤック語、アリュート語のいずれにおいても、同一の節に 3 人称代名詞がある場合、その数を示すには、人称代名詞の形式上の区別ではなく、動詞に付加される要素が用いられる点、また、その数を示す要素が、文法役割の如何を問わず、同じ節に現われる 3 人称代名詞と無差別的に結びつきうる点が共通してみられる。ただ、それらの 3 つの言語を仔細にみてみると、ハイダ語とイーヤック語は、無差別的な数標示がかなり分かりやすいのに対し、アリュート語は、動詞に付くのと同じ標識が所有句における被所有者にも付加されるため（(16) 参照）、かなり複雑な体系をなしている（詳細は、Leer 1991: 172–174 参照）。また、これらの 3 言語のうち、ハイダ語は、動詞において主語などの人称や数が標示されない点で、イーヤック語とアリュート語とは異なる。

これらの言語に比べて限定的ながら、トリンギット語にも無差別的な数標示がみられる。トリンギット語においても、3 人称代名詞には数の区別がなく、主語か目的語となる 3 人称代名詞の複数性を示すために接語 *has*=が用いられる。次の例（いずれも Leer 1991: 166 による）のうち、*has*= が付加された (17b) は、その目的語（この場合は 3 人称代名詞 ∅）が複数であることを示している。

(17) a. ∅-χwasitìːn.
3-1SG.saw
「私は彼（女）をみた」
b. **has**=∅-χwasitìːn.
PL=3-1SG.saw
「私は彼（女）らをみた」

3 人称代名詞が主語と目的語の両方に現われているような例として、次の (18a) をみてみ

ると、3 人称の複数性を示す *has*= が主語と目的語（*ʔa-*[16]で示される）のうちのいずれかと結びつくことによって、やはり曖昧性が生じる（例は Leer 1991: 167 による）。

(18) a. **has**=ʔa-wsitìːn.
PL=3-3.saw
「彼（女）らは彼（女）をみた／彼（女）・彼（女）らは彼（女）らをみた」
b. ʔa-wsitìːn.
3-3.saw
「彼（女）は彼（女）をみた」

Leer (1991) によれば、トリンギット語における無差別的数標示は、3 人称代名詞が動詞の主語や目的語として働く場合に限って見られるものである。その点でいえば、ハイダ語、イーヤック語、アリュート語は所有句における所有者、また、ハイダ語とイーヤック語は後置詞句の目的語として現われる 3 人称代名詞にも無差別的な数標示が働くので、それらの言語に比べれば、トリンギット語の無差別的数標示は限定的であるといえる。

以上、ハイダ語、イーヤック語、アリュート語、トリンギット語において、3 人称代名詞の複数性が動詞に付く標識によって示されることをみてきた。更に、同じ節に二つ以上の 3 人称代名詞が現われる場合には、その複数性を示す標識は、そのいずれとも結びつきうる点において、これらの言語は共通しているが、トリンギット語だけは、3 人称代名詞が動詞の項である場合に限定されるのに対し、残る 3 言語にはそのような制約がない。このことから、Leer (1991) は、トリンギット語を、これら 3 言語から少し離れた周辺に位置するものと見做している。

次の節では、ハイダ語、イーヤック語、アリュート語の関係を見てみるために、迂言的所有構造を取り上げる。

2.2 迂言的所有構造

2 つ（かそれ以上）の名詞句が所有構造をなすには、それらのいずれか（あるいは両方）に所有関係を示す標識が付加されるのが一般的である。その際、一方の名詞が所有者、もう一方が被所有者を表わす。所有関係を示す標識は所有者に付く場合もあれば（すなわち、従属部標示型）、被所有者に付く場合（すなわち、主要部標示型）、その両方に付く場合（二重標示型）、あるいは両方に何も付かない場合（無標示型）がある。いずれにしても、所有者と被所有者となる名詞のいずれか一方あるいは両方に標識が付いたり、両者が並置されることによって所有関係を表わすのが一般的である。しかしながら、ここで扱う迂言的所有構造とは、統語的には述語と結びつく副詞句（例えば、後置詞句）の中に現われる名詞が、同じ節に現われる別の名詞と意味的に所有関係をなしていると解釈されるものである[17]。Leer

[16] 主語が 3 人称であるときに用いられる（Crippen 2019: 721）。他の人称の場合は ∅- である（cf. (17a)）。
[17] 次のスペイン語の例（Leer 1991: 179 による）と比較。
me duele el brazo (1SG.DATIVE 3SG.hurt the arm)「私の腕が痛む」
1 人称与格代名詞 *me* は、名詞 *el brazo* ‘the arm’ の意味上の所有者を表わしている。

(1991) によれば、それがハイダ語とイーヤック語に共通してみられる。いずれの言語においても、被所有者名詞が譲渡可能所有であるか、譲渡不可能所有であるかによって所有構造が異なるが、ここで問題となっている迂言的所有構造は、譲渡可能所有表現にみられる。

その迂言的所有構造の例として、次にあげるイーヤック語をみてみると、後置詞句 *ʔu=χaʔ*「彼（女）の方へ」[18]が統語的に結びつくのは動詞の方であるが、意味的には、その前の名詞 *χəwa:*「犬」と結びつき、その所有者を表わしている。

(19) χəwa: **ʔu=χaʔ** ʃəʃhɬ=ĩh.
dog 3=onto 3.kill.3=human.SG
「彼（女）・それが彼（女）の犬を殺した／彼（女）の犬が彼（女）・それを殺した」[19]

一方、ハイダ語においては、譲渡可能所有は、接辞 *-ga*（ひとまず所有標識とする。後述参照）を所有者となる名詞に付加することによって表わされる[20]。例えば、イーヤック語の (19) に相当する表現は、(20) のようである。

(20) χaagaay ’laa-ga ’laa tyaah-gən.
the.dog 3-POSS 3 kill-PST
「彼（女）は彼（女）の犬を殺した」

一見したところ、*χaagaay ’laaga*（その犬 彼（女）の）全体で所有句をなしているようであるが、実際には、この文に対する疑問文 (21a) をみると、それらが少なくとも統語的には所有句をなしていないことが分かる。

(21) a. χaagaay=gwaa ’laa-ga ’laa tyaah-gaa?
the.dog=INTER 3-POSS 3 kill-EVD
「彼（女）は彼（女）の犬を殺したか」
b. χaagaay ʔiwjuu=gwaa ’laa tyaah-gaa?
the.dog big=INTER 3 kill-EVD
「彼（女）はその大きな犬を殺したか」

すなわち、疑問標識 *=gwaa* は、文の最初に現われる句に付加されるのが原則であるので、*χaagaay ’laaga* 全体が所有句をなしているのであれば、疑問標識は *’laa-ga* に付加されるはずである。実際、(19b) では、この疑問標識は *χaagaay ʔiwjuu*（その犬 大きい）「その大きな犬」という句全体に付加されている。このようにみてみると、(21a) の *χaagaay ’laaga*（その

[18] Krauss (2025) は、この後置詞を所有標識 (possessive) としている。
[19] 「彼（女）が」という訳は、末尾の *=ʔĩh* が 3 人称主語と結びついているという解釈、一方、「彼（女）の」という訳は、それが意味上の所有者と結びついているという解釈に基づく（(8)、更に所有者の数を標示しているという点でハイダ語例の (5) なども参照）。
[20] ハイダ語の譲渡可能所有には、迂言的な方法だけでなく、所有標識を用いた表わし方もある。例えば、*’laa=gyaaga χaagaay* (3=POSS the.dog)「彼（女）の犬」など（詳しくは堀 2021 を参照）。

犬 彼（女）の）は、意味的には所有関係を表わすと解釈できるものの、統語的に所有句をなしているとは見做し難い[21]。

更に、意味的に所有者を表わす要素が被所有者を表わす名詞と統語的に結びついていないのであれば、その意味上の所有者は、同じ節に現われる如何なる名詞句とも意味的な所有関係を表わすことができるはずである。実際、同じ節に複数の名詞があり、そのうちの一つが明示されていない（つまり ∅ の）場合に、意味上の所有者がそのいずれの名詞と意味的に結びつくかによって、二通りの解釈ができることがある。例えば、次の (22) のように、二つの名詞句のうちの一つが明示されていない（∅ で示す）場合、その意味上の所有者を表わす *'laa-ɢa* が二つの名詞句のいずれと結びつくかによって二通りの解釈が可能である。すなわち、(22a) は ∅（文脈から「魚」を示す）と、(22b) は *k'aalc'ida* 'crow' と結びつくとする解釈である。

(22) a. k'aalc'ida ∅ 'laa-ɢa hayluuda.
crow (fish) 3-POSS ate.up
「鴉は、彼の（魚=∅）を食べ尽くした」
b. k'aalc'ida 'laa-ɢa ∅ hayluuda.
crow 3-POSS (3) ate.up
「（彼（女）=∅）は、）彼（女）の鴉を食べ尽くした」

いずれの例においても、意味的な所有関係をなす句が他動詞節の目的語となっているが、統語的な制約はなく、他にも他動詞節の主語や自動詞節の主語とも意味的に所有関係をなすことがあり得る[22]。すなわち、ハイダ語では、同じ節に現われる名詞と無差別的に結びついて意味上の所有関係を表わすことがある。それは、Leer (1991) によれば、意味上の所有者を表わす *'laa-ɢa* が位置的に固定されていることと関係する（後述参照）。一方、イーヤック語では、意味上の所有者を示す後置詞句がその前の名詞と意味上の所有関係を表わすため、ハイダ語にみるような曖昧性は生じない。例えば、次のイーヤック語例 (23) において、問題となる *si=χaʔ* (1SG=onto) は、それぞれ先行する名詞と結びついて所有句（「私の悪い犬」と「私の靴」）をなしている。

(23) χəwa:-ʃiyah si=χaʔ ʔəw sĩ:ɬ si=χaʔ yaʔ qədəsəʔaʔtl'
dog-lousy 1SG=onto that shoe 1SG=onto completely 3.chewed.3
「私の悪い犬が私の靴を噛んでめちゃめちゃにした」（Leer 1991: 183）

[21] このような意味上の所有句の所有者と被所有者の間に他の要素が現われる例については堀（2021）を参照。
[22] (22a) はテキストに実際に現われた文であり、それを別のように解釈したのが (22b) である。ちなみに、両者の語順をみると、(22a) は主語・目的語・述語、(22b) は目的語・主語・述語となっているが、前者はいずれも普通名詞である場合の語順、後者は主語が人称代名詞の場合の語順であり、意味上の所有者がどの名詞と結びつくかということとは別の統語的な要因による違いである。

それでは、これまでのハイダ語の例において所有標識とした *-ɢa* は何であろうか。Leer (1991: 183) は、この所有標識とした接辞は、後置詞 NP=*ɢa*「NP について」に由来すると想定している。すなわち、所有者とみられるものは、通時的にみれば後置詞句に遡り、その点では、(19) や (23) でみたイーヤック語の意味上の所有者を表わす後置詞句による構造と同じであるといえる。そのことは、次のような譲渡不可能所有表現にも現われている。

(24) a. ’lə=k’yaal ’laa-ɢa łə=sdasgiidən.
3=leg 3-POSS I=kick[PST]
「私は彼（女）の足を蹴った」
b. ’lə=k’yaal łə=sdasgiidən.
3=leg I=kick[PST]
「私は彼（女）の足を蹴った」

すなわち、譲渡不可能所有のうち、被所有者名詞が身体部位名称である場合は、(24b) のように、所有者を表わす人称代名詞（この場合は、付属形の 3 人称代名詞 *’lə=*）を付けるだけで所有関係が表わされるが、一方で (24a) のように、譲渡可能所有表現で所有者を表わす *’laa-ɢa* (3-POSS) を加えることもできる。これらの表現の間の意味的な差異については明らかにし得ていないが、やはり *’laa-ɢa* が本来的に後置詞に由来するものであるとするならば、統語的に *k’yaal* ‘leg’ と所有関係をなしていないゆえに、このような表現ができると考えられる。

この後置詞 **=ɢa* がハイダ語において、どのように所有者を表わすようになったのかについて、Leer (1991: 183f.) は、節の中において、この後置詞が、主語となる人称代名詞を含む拡張的な動詞複合体 (extendend verb complex)（(25) の a の段階で [ ] で括られた部分）の一部となり（(25) の b の段階)、その結果、その動詞複合体の外にある名詞（NP_1）の後ろに固定されるようになったと考える。

(25) a. NP_1 NP_2=*ɢa* [pro-S V] > b. NP_1 [NP_2=*ɢa* pro-S V]
（pro：人称代名詞，S：主語，V: 動詞）

このように位置が固定された後置詞 *=ɢa* は目的語（NP_2）も人称代名詞に限定され、最終的には、それに先行する名詞句（= (25) の NP_1）と意味的に結びつき、それとの所有関係を表わす標識（接尾辞）へ変化した。上の (22b) でいえば、*’laa-ɢa Ø hayluuda* (3-POSS (3) ate.up) 全体が拡張的な動詞複合体をなし、その中の *’laa-ɢa* が、外側にある *k’aalc’ida* ‘crow’ と所有関係を表わすようになった。

より古い形態を残すスキドゲット方言では、形式的には *-ɢa* のままであるが、北部方言[23]では **ɢ* が脱落し、人称代名詞と融合して、Leer (1991) がいう限定人称代名詞 (attributive

[23] ハイダ語の方言は大きく分けて北部方言と南部方言からなる。北部方言には、カナダ北西海岸のハイダ・グワーイ（旧名：クィーン・シャーロット諸島）の北部で話されるマセット方言とアメリカ合衆国のアラスカ州南東部で話されるアラスカ方言が属し、南部方言はスキドゲット方言（ハイダ・グワーイ）だけが

pronoun) へ発展した。すなわち、一連の変化として、3 人称代名詞（*'laa*）を例にとると、次のような過程を経たと考えられる。

(26) *'laa=ɢa > a. 'laa-ɢa > b. 'laaŋaa

ハイダ語のスキドゲット方言では (26) の a の段階でとどまったのに対し、北部方言では (26) の b の段階にまで変化し[24]、更に、所有者を表わす限定人称代名詞へと再分析がなされ、同じ節に現われる他の名詞句との所有関係を示すようになった。

一方、イーヤック語は、ナ・デネ大語族に属するトリンギット語やアサバスカ語族と同様に、本来的には非所有形と所有形の区別があり、後者は接辞によって示される（例：アサバスカ祖語の **χe:* 'oil, grease'（非所有形）に対して、所有形 **wə-ʁeʔ* 'its oil, grease' [Leer 1991: 185]）。しかし、イーヤック語は、ハイダ語、あるいは、やはり迂言的所有構造をもつ他の北部北西海岸地域の（現存しない）言語の影響によって、その本来の所有形を使わなくなり、迂言的所有構造を用いるようになった。更に、トリンギット語がイーヤック語とハイダ語の間に割り込むように入ってきて、その迂言的所有構造の後置詞句とその先行名詞が所有句をなすと再解釈された（Leer 1991: 185）。

以上みてきたように、この迂言的所有構造は、ハイダ語とイーヤック語にのみ観察されるものであり、後者は前者の影響を受けて発達させたものであろう。更に、イーヤック語においてよりはっきりと所有関係を示すようになったのは、迂言的所有構造がなく、直接的に所有句をなすトリンギット語の影響によるものである。更に、2.1 でみた無差別的数標示の特徴をこれらの言語と共有するアリュート語は、この迂言的所有構造を持たないことから、ハイダ語とイーヤック語とは少し離れた関係にあるといえる。

2.3 その他の地域特徴

Leer (1991) は、北部北西海岸言語領域において共有される強い特徴として、無差別的数標示（2.1）と迂言的所有構造（2.2）に加えて、唇音の欠如あるいはその少なさをあげている。両唇阻害音を欠くのはアリュート語、イーヤック語、トリンギット語、更にアサバスカ祖語であり[25]、ハイダ語においては、音節末尾に現われ得るものの、音節初頭の位置に現われる両唇阻害音は稀であるという点で音素目録の上では周辺的に位置づけられる。隣接する地域をみてみると、ツィムシアン語と更にその南側の言語ではおしなべて両唇阻害音が一般的にみられる。

一方、この領域に属する言語のすべてあるいは一部において共有される弱い特徴として Leer (1991) があげるものに、まず、声門化共鳴音がある。この領域の言語の中では、イーヤック語とハイダ語においてのみみられ、しかも音節初頭の位置にしか現われない。更にいえ

現存する。

[24] 音韻変化のプロセスの詳細については不明であるが、Leer (1991: 184) は、元の後置詞にあった **ɢ* が母音の後で脱落し、その代わりに *ŋ* が挿入されたとしている。

[25] Woodbury (1984: 62) によれば、エスキモー・アリュート祖語には **p* があったが、アリュート語では環境によって /h/（語頭）や /m̥/（語中）に変化した。また、イーヤック語とトリンギット語については、ナ・デネ祖語の段階で両唇音のない体系が再建されている（参考：Leer 2010: 170）。

ば、ハイダ語では側面接近音にのみみられる程度であり、やはり周辺的な音素でしかない。この声門化共鳴音もまた、ツィムシアン語、更に北西海岸地域の南側の言語においてかなり広くみられる音である。

他に弱い特徴として、Leer (1991) は主要部が末尾にくる点、数標示が 3 人称の人間に対してのみなされる点[26]、また、動作的・被動的（あるいは活格・不活格）の区別に基づくアラインメントをあげている。

以上をまとめると、次の表のようになる（Leer 1991: 189 にある表を一部改変した）。

表：北部北西海岸言語領域における言語特徴の分布

強い特徴	Aleut	Eyak	Tlingit	Haida	Ath
① 両唇阻害音の欠如・少なさ	+	+	+	(+)	+
② 無差別的数標示	+	+	(+)	+	
③ 迂言的所有構造		+		+	
弱い特徴					
④ 主要部末尾の統語法	+	+	+	+	+
⑤ 3 人称の人間のみの数標示		+	+	+	+
⑥ 動作的・被動的アラインメント			+	+	
⑦（音節初頭の）声門化共鳴音		(+)		(+)	

（Ath: アサバスカ語族）

「弱い特徴」とされるものは、上でも触れたように、この領域に限定されるわけではなく、北部北西海岸言語領域とその周辺の言語にもみられるものである。

この特徴の分布から、イーヤック語とハイダ語が③を共有する点で北部北西海岸言語領域の中心をなすといえる。また、②の特徴を共有することから、アリュート語がそれらの言語に加わり、微弱ながらその特徴が認められるトリンギット語がその周辺に位置づけられる。更に、弱い特徴とされる④と⑤があるアサバスカ語族の言語が、この領域の更に外側に位置するという関係になっている。

2.4 北部北西海岸言語領域の歴史的背景とその問題点

ここでは、Leer (1991) を中心に、北部北西海岸言語領域がどのように形成され、更に、その後、どのような過程を経て、現在のようになったのかについて概観する。

上でも触れたように、Leer (1991) は、迂言的所有構造を共有するハイダ語とイーヤック語が長期にわたって接触していたとみている。後者が前者の影響を受けて、その構造をもつに至ったが、それには、類似の所有構造をもつ、すでに死語となったであろう別の言語が介在していた可能性を指摘している。また、この言語領域を構成するもう一つの言語であるアリュート語は、これらの言語と地理的にみて離れており、おそらく緩い連続体をなしていたという。

[26] Leer (1991) によれば、この特徴はワカシュ語族のクッキュートル語にもみられる。

この言語領域は、内陸部にあったトリンギット語が沿岸部に来ることによって、ハイダ語とイーヤック語を分断する。トリンギット語は、元来、北部北西海岸言語領域の外側にあったが、おそらくそれらの言語のいずれか一方（あるいは両方？）の影響を受けて、微弱ながら無差別的数標示をもつようになったのであろう。加えて、やはりその言語領域の外側にあったアルーテク語 (Alutiiq)（スフピアック語あるいは太平洋ユピック語ともいう）が移動してきて、その結果、アリュート語とイーヤック語が分断されることとなった。

Leer (1991) は、このように北部北西海岸言語領域に関わる歴史的な経緯を想定しているが、一つ問題となるのは、イーヤック語とトリンギット語、ハイダ語が本来、どこで話されていたのか、更に、これらの言語がいつ頃、どのように移動したのかという点である。

これらの言語のうち、イーヤック語とトリンギット語は、ともにナ・デネ大語族に所属する。Krauss (2025) によれば、ナ・デネ祖語から最初に分岐したのはトリンギット語であり、それが 4500 年前と推定されている。その後、およそ 3500 年前に、イーヤック語がアサバスカ祖語から分岐する。トリンギット語がナ・デネ祖語から分岐した頃、ナ・デネ祖語は今日のユーコン準州辺りの内陸部にあったと推定され、トリンギット語は、そこから沿岸部に移動したと考えられる。それに対して、アサバスカ祖語の故地ははっきりしていないけれども、Krauss (2025: 39) は、今のイーヤック語が話される沿岸部の北もしくは北東のアラスカ州とユーコン準州の境界辺りであったとみるのが妥当であるとする。いずれにしても、トリンギット語とイーヤック語はともに内陸側に位置していたが、先に沿岸部に到達したのはトリンギット語の方である（同: 40）。もしそうであったとするならば、上に述べたように、迂言的所有構造という特徴を共有するイーヤック語とハイダ語が緊密に接触していたのは、イーヤック語が沿岸部に到達する以前であったとしなくてはならない。

そのハイダ語は、今ではハイダ・グワーイで話されているが、その集団は、本来、北米大陸本土にいたのか、もしそうであったとするならば、いつ頃、ハイダ・グワーイに移住したのかについて確たる年代は分からない。いずれにしても、ハイダ・グワーイには古いところで 9500 年前の遺跡が認められることから（参考：Fedje and Mackie 2005）、そうなると、ハイダ語とイーヤック語が緊密に接触していたとする可能性は低くなる[27]。ただ、Enrico (2004) によれば、イーヤック語からハイダ語に入ってきたと思われる借用語が認められ、そのことが、本土の内陸部においてハイダ語がイーヤック語と接触していた証拠であるとしている。ハイダ語には、トリンギット語から多くの借用語が入ってきているが、イーヤック語からの借用語は、トリンギット語からのそれよりも古い時代に入ってきたものであろうとしている（Enrico 2004: 287）。いずれにしても、Enrico (2004) があげるイーヤック語からの借用語と見做されるものが、実際にそうであるのか、その点は更に検証を重ねる必要がある。

[27] ハイダ語がナ・デネ大語族に帰属すると主張する Enrico (2004) は、ナ・デネ大語族が沿岸部にあったと見做し、そのうち、まず、アサバスカ語族・イーヤック語・トリンギット語が内陸部に移動したことによってハイダ語と分岐し、更に、イーヤック語がアサバスカ語族とトリンギット語から分岐した後に沿岸部に移動したことによって、一時期、ハイダ語と接触したと推定している。しかし、そもそもハイダ語がナ・デネ大語族に帰属するとして Enrico (2004) があげている根拠は説得力を欠き（参考：堀 2022）、ナ・デネ大語族の故地を沿岸部にあったとするのもハイダ語がナ・デネ大語族に帰属するという前提のもとの仮説に過ぎない。

一方、北部北西海岸言語領域をなすとされるもう一つの言語であるアリュート語は、4000年前にエスキモー語と分岐した後、他の言語と接触することなく、独自に変化し、その結果、今日では、エスキモー語との間に、特に基礎的な語彙における同源語の割合が低いとされてきた（Berge 2018 の記述による）。しかし、一方では、Berge (2018, 2019) は、アリュート語（特に東側の方言）とナ・デネ系の言語の間に接触があったことを示唆し、更に、言語以外の面では、アリュート族は、北西海岸地域の諸族と、神話、慣習、社会組織などの特徴を共有していたという指摘（Berge 2019: 646）もある。

いずれにしても、このように考えれば、アリュート語が、エスキモー語と分岐した後、他の言語とほとんど接触することがなかったとするよりも、他の言語と何らかの接触をしていたと考える方が妥当であるといえる[28]。おそらく周辺の集団と交易が行なわれていたのであろうが、奴隷制が、特に人口が多かったアリューシャン列島の東側で発達しており、Veniaminov (1984) によれば[29]、アリュート族は、東側ではアルーテク族、トリンギット族、タナイナ族などからも交易や戦争を通じて、それぞれの女性や子どもを手に入れていた。このように、少なくともアリューシャン列島の東側においては、アリュート語を話す女性や子どもは奴隷を通じて、アリュート語以外の言語に触れる機会があったことが考えられる（Berge 2018: 33）。それらの言語の中には、今では死語となった言語が含まれていた可能性も高いと思われる。更に、そのことは、Leer (1991: 188) によれば、アリュート語とイーヤック語の間に借用形式が乏しい点にも現われている。

以上みてきたように、Leer (1991) が提唱する北部北西海岸言語領域をより確実なものとするには、つまるところ、ハイダ語、イーヤック語、トリンギット語が移動した年代、また、アリュート語とそれらの言語、更に、北西海岸地域における他の言語とどのような接触があったのかなど、いまだ解明すべき点が多々ある。

３．北西海岸地域の言語領域

北アメリカ北西部は、多くの語族・言語がひしめき合うように密集する極めて特異な地域である。宮岡（1992b）によれば、北アメリカ大陸に認められる 58 の語族（孤立言語を含む）（宮岡 1992a）の 6 割がその地域に分布する[30]。系統的な多様性は、類型的・構造的な多様性と比例するが、その一方で、この地域の言語に共通する特徴も指摘されている（Thompson and Kinkade 1990，宮岡 1992b，Thomason 2014，Thomason 2023 など）。例えば、音声面、就中、子音音素の数が多いというのは、おしなべてこの地域の言語で共通してみられる特徴である。子音体系をとりわけ複雑にしているのが、放出音と声門化共鳴音、側面摩擦音・側面破擦音、軟口蓋音と対立する口蓋垂音（後部軟口蓋音）などである。特に前二者は、世界の

[28] 宮岡（1988: 911）は、アリュート語内部の分岐の度合いが浅い理由として、アリュート語に近い同系の方言または言語がその痕跡を残さずに消滅した可能性を示唆している。
[29] Berge (2019: 33) による。Liapunova (1996: 138ff.) も参照。
[30] 宮岡（1992b）でいうところの「北西部」は、文化領域でいうところの「北西海岸文化領域」のみならず、カリフォルニア、台地の一部、亜極北と極北の西端部が含まれるが、そこに含まれる言語や地理的な境界について一致した見解があるわけではない（参考：Thomason 2014: 727）。以下で「北西海岸地域」というのはおおよそ宮岡（1992b）の「北西部」に相当する。

言語を見渡してみても、この地域以外では散発的にしかみられず、その意味でも、これらの音は、この地域を特徴付けているといえる。

しかし、一方で、形態統語的な特徴となると、この地域の汎言語的なものはない。例えば、Sherzer (1976) によれば、譲渡可能所有と譲渡不可能所有の区別は、北西海岸文化領域に属する言語の多くにみられるけれども、多彩な重複法の使用や類別数詞は、一部の地域、更にいえば、北西海岸文化領域でもその中心部に位置する言語に限られている。概して、Thomason (2014: 728) が指摘するように、その地域でも中心部の言語は、共有する特徴が多いのに対し、その周辺にいくほど、そのような特徴が少なくなる。それは、すなわち、中心部ほど、より頻繁に、また、緊密な接触があったからであろう。その中心部に位置するとされるセイリッシュ語族 (Salishan)、ワカシュ語族 (Wakashan)、チマクム語族 (Chimakuan) は、その構造的な類似性ゆえに系統関係があるとして、「モース大語族 (Mosan)」をなすとする説（Frachtenberg 1920 など）が一時期唱えられたが、それらの間の類似性を祖語に由来するものではなく、長期にわたる接触によって生じた地域特徴であると見做し、言語領域として捉える試みが Beck (2000) によってなされている。

Beck (2000) が上述の 3 つの語族からなると唱える「中部北西海岸言語領域」は、音韻面での特徴に加え、形態面では接尾辞が優勢であること、多彩な語幹重複の使用、語彙的接尾辞の発達、数詞類別など、統語面では VSO（述部・主語・目的語）を基本語順とする点などの特徴を共有する。これらの語族の系統関係を証明する試みの中で、共通する文法特徴がありながら、一定数の同源語が見出し得なかったのは、これらの文法的な特徴が祖語に由来するのではなく、長期にわたる接触の中で徐々に収斂して生じたからである（Beck 2000: 149）。

この中部北西海岸言語領域に共通するとされる特徴のうちのいくつかは、そのすぐ北に位置するツィムシアン語族 (Tsimshianic) にも見出される。ツィムシアン語族は、北部北西海岸言語領域と中部北西海岸言語領域の間に位置し、前者に属するハイダ語、また、その周辺に位置づけられるトリンギット語と経済的・文化的に深い関係をもっていた一方で、言語的には前者よりも後者に構造的に近いことが Beck (2002) により指摘されている（その具体例については堀・笹間 2024 も参照）。Beck (2002) は、ツィムシアン語族とセイリッシュ語族、分けても飛び地的に分布するベラクーラ語 (Bella Coola) との間の接触が古く、その後に隣接するワカシュ語族から影響を受けた可能性を示唆している。

この節の冒頭で述べたように、北アメリカ北西部に分布する諸言語には、系統的な多様性、更に、それと呼応するように構造的多様性が認められる。しかし、その地域の中を詳しくみてみると、系統関係をもたないいくつかの言語同士が構造上の特徴を共有することも明らかになってきた。それが本稿でみてきた二つの言語領域である。それらを真の言語領域と見做し得るかについては、今後の更なる研究の進展に委ねなくてはならないが、最後に、これほど系統的に隔たっている言語同士が類似性をみせるようになったその要因についていくつか私見を述べてみることにする。

４．おわりに―北西海岸地域の言語接触

北アメリカ北西海岸地域という比較的狭い地域に、多くの異なる言語が密集するという事実から、それらの言語を話す集団が長期間にわたって、互いに何らかの交渉があったこと

は想像に難くない。それは、人口密度が低く、民族間の交渉があまりなかった北アメリカの北東文化領域のような地域（Sherzer 1976）とは対照的である。実際、北西海岸地域においては、広範囲にわたって、交易や戦争、族外結婚などが頻繁にあり（参考：Drucker 1965 など）、そうした出来事を通じて、歌や紋章、踊りなどが交換されていたことが知られている。それらの出来事がこの地域の言語に如何なる影響を与えたのか、その詳細を解明するのはかなり難しい問題ではあるが、例えば、戦争などで他の集団から捕らえられ、様々な労働の担い手であった奴隷のやりとりが民族集団の間で行なわれていたのも言語接触において大きな影響を与えたと考えられる。奴隷は交易の対象でもあり、そういった奴隷交易の集団間ネットワークが、北西海岸地域においては広範囲にわたって発達していた。更に、北西海岸地域の各集団をみてみると、奴隷人口の割合が比較的高かったゆえに、それぞれの集団において、奴隷の存在は経済的、政治的にそれなりの影響が大きかったことが想像される（Donald 1997: 194ff.）。そのように考えてみると、それぞれの集団の住む地域において他の言語に触れる機会が少なからずあり、それらの社会は、二言語あるいは多言語を用いるのが常態であったことが窺われる。そのことは、更に、交易用の言語としてチヌーク・ジャーゴンがこの地域で広く用いられていたことからも裏付けられる（参考：Thomason 1983）。

これに関連して、Ross (2003) は、接触によって言語変化が引き起こされる場合、外部との関係性、内部の緊密性によって、その社会で話される言語（方言を含む変種 (lect)）の変化の様相が異なることを論じている（Andersen 1988 も参照）。すなわち、前者は、その共同体が閉鎖的で外部との接触がほとんどないか、それとも逆に開放的で外部や上部の話者と接触があるかに関わるものである。対して、後者の内部の緊密性は、その共同体が言語的な結束性、すなわち連帯感があるか否かに関わるものであり、緊密性に欠ける共同体は、話者同士の結束性が緩く、自分たちの変種を放棄する傾向にあるが、逆に緊密性のある共同体は、自分たちの変種に象徴的な意義があるとして重きを置く（Rose 2003）。

これら二つの点からみてみると、ヨーロッパ人と接触するまでの北西海岸地域のそれぞれの社会は、外部との接触が頻繁にあった点で開放的であり、また、外部の集団と「平衡のとれた棲みわけと共存」（宮岡 1992b: 14）のもと、存続し得たことから緊密性があったと考えられる[31]。このような社会では、外部との接触のために、母語にほぼ相当する一次変種（primary lect）に加え、一つかそれ以上の二次変種 (secondary lect)（いわゆる第二言語などに相当）が話されているのが特徴の一つである（Ross 2003: 183）。更に、このような社会においては、二次変種との二言語併用の結果、一次変種が形態統語面における変化を蒙ることがある（同: 183）。しかし、それは必ずしも形式そのものの借用を伴うものではない（同: 187）。このような捉え方からすれば、上に述べた北部北西海岸言語領域や中部北西海岸言語領域に含まれる社会は、Ross (2003) がいう開放的で緊密性の高い社会の典型であり、まさに言語領域をなす土壌が十分あったことが窺われよう。

ちなみに、Ross (2003: 193) は、借用語については、二言語あるいは多言語使用がなくても起こることを指摘し、借用は言語接触ではなく、文化的接触に帰せられるものであるとし

[31] 勿論、一方では、緊密性に欠けていたために、周辺の言語に吸収されてしまった言語も多くあったであろう。

ている。ここで述べた言語領域のうち、特に北部北西海岸言語領域においては、語彙レベルの借用は、先に述べたように、イーヤック語からハイダ語、あるいは、アリュート語とイーヤック語の間には認められるものの数は多くなく、アリュート語とハイダ語の間に借用形式は認められていない。それらの言語を話す集団同士の文化的接触の程度は分からないが、仮に何らかの接触があったとしても、それは、やはり個々の社会における緊密性が高かったことも関係しているのではないかと考えられる（中部北西海岸言語領域については、Beck 2000: 150 も参照）。

最後に、そもそもこれほど多種多様な言語がこの北西海岸地域に錯綜するように分布しているのはなぜなのかという問題について触れておく。もとよりこの問題に関して、筆者は全くの門外漢であるが、北東アジアから渡ってきた人類が北アメリカの沿岸を伝って、この地域に一定期間定住し、アメリカ大陸を覆っていた氷河が溶けた後、一部が東側へ移動していったという、沿岸ルート説がある。この説の根拠の一つに、言語の分岐の深さは定住の長さによるとする考え方がある。その考えに従うならば、分岐が深い、すなわち、系統的に多様な言語が密集する北西海岸地域は、言語の分布が比較的なだらかな他の地域に比べて定住期間が長いといえる。この沿岸ルート説は、まさにこの北西海岸地域の言語の分布状況に基づくものである（Gruhn 1988, 宮岡 1992a, 1992b などを参照）。

北米先住民の移住ルートに関しては諸説あるが、言語と関連付けて論じた、比較的最近の論考として Nichols (2025) がある。それは、考古学的な知見などに加え、言語構造上の特徴（例えば、1 人称/2 人称における *n*/*m* 代名詞 [Nichols and Peterson 1996]、子音体系の複雑さ、複統合性、名詞抱合、主要部標示型など）との相関を見ながら、北米への人類の移住を考察したものである。それによると、2 万 4 千年から 1 万 5 千年かそれ以上前に第一の人口の層 (stratum) が沿岸部（今日のアメリカ合衆国のオレゴン州とカリフォルニア州辺り）から入り、更に、1 万 2 千年かそれ以上前に、最初は内陸、続いて内陸と沿岸の両方から第二の人口の層が入ってきたとみている。それぞれの層が持っていたとみられる言語特徴が果たして妥当であるのか、また、その後の移住の経路が果たしてどうであったのか、更に解明すべき疑問は尽きないが、大きな氷床の間にできた無氷回廊を伝ってきたとする従来の大陸内ルート説よりも、沿岸部から人類が入ってきたとする説は説得力があるように思われる。今後の研究の進展が俟たれるところである。

この地域のように、古い文献資料がないという圧倒的に不利な状況の中で、言語学が解明し得ることには限りがあるが、一方で、北アメリカあるいはその他の地域における言語接触や多言語社会の事例、更に、隣接分野（例えば、考古学や分子人類学など）の知見は、様々な問題の解明に示唆を与えるものと思われる。いろいろな分野に跨がる問題を多く蔵するこの北アメリカ北西海岸地域は「豊かな実りを約束する沃野」（宮岡 1992b: 51）であることは確かである。

参考文献

Andersen, Henning (1988) Centre and periphery: Adoption, diffusion and spread. In: Fisiak, Jacek (ed.), *Historical dialectology*: 39–85. Berlin: Mouton de Gruyter.

Beck, David 2000. Grammatical convergence and the genesis of diversity in the Northwest Coast *Sprachbund*. *Anthropological Linguistics* 42 (2): 147–213.

——— (2002) Tsimshianic from a Central Northwest areal perspective: I. In: Carrie Gillon, Naomi Sawai, and Rachel Wojdak (eds.), *Papers for the Thirty-Seventh International Conference on Salish and Neighbouring Languages*: 35–60. Vancouver: University of British Columbia Working Papers in Linguistics.

Berge, Anna (2018) Re-examining the linguistic prehistory of Aleut. In: Iversen, Rune and Guus Kroonen (eds.), *Digging for words: Archaeolinguistic case studies from the XV Nordic TA Conference held at the University of Copenhagen*, *16–18 April 2015*: 30–38. Oxford: BAR Publishing.

——— (2019) Language contact in Unangam Tunuu (Aleut). In: Grant, Anthony P. (ed.), *The Oxford handbook of language contact*: 643–659. Oxford: Oxford University Press.

Crippen, James A. (2019) *The syntax in Tlingit verbs*. Ph. D. dissertation, The University of British Columbia.

Donald, Leland (1997) *Aboriginal slavery on the Northwest Coast of North America*. Berkeley: University of California Press.

Drucker, Philip (1965) *Cultures of the North Pacific Coast*. San Fransico: Chandler Publishing.

Enrico, John (2004) Toward Proto-Na-Dene. *Anthropological Linguistics* 46 (3): 229–302.

——— (2005) *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Fairbanks: Alaska Native Language Center / Sealaska Heritage Institute.

Fedje, Daryl W. and Quentin Mackie (2005) Overview of cultural history. In: Daryl W. Fedje and Rolf W. Mathewes (eds.), *Haida Gwaii: Human history and environment from the time of loon to the time of the iron people*: 154–162. Vancouver: UBC Press.

Frachtenberg, Leo J. (1920) Abnormal types of speech in Quileute. *International Journal of American Linguistics* 1 (4): 295–299.

Gruhn, Ruth (1988) Linguistic evidence in support of the coastal route of earliest entry into the New World. *Man* 23 (1): 77–100.

堀　博文 (2021)「ハイダ語の所有構造と譲渡可能性」，呉人惠・笹倉いる美・山田敦士（編）『津曲敏郎先生古稀記念集』: 243–262，網走：北海道立北方民族博物館.

———(2022)「ハイダ語（北米先住民諸言語）の系統をめぐって」，岸上伸啓（編）『環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究動向』（国立民族学博物館調査報告 156）: 357–385，吹田：国立民族学博物館.

堀　博文・笹間史子 (2024)「北アメリカ北西海岸地域における言語間接触について」，岸上伸啓（編）『北太平洋の先住民文化ー歴史・言語・社会』: 113–128，京都：臨川書店.

Krauss, Michael E. / Baetscher, Kevin and Gary Holton (eds.) (2025) *A grammar of Eyak*. (Mouton Grammar Library, volume 88) Berlin: De Gruyter Mouton

Leer, Jeff (1991) Evidence for a Northern Northwest coast language area: Promiscuous number marking and periphrastic possessive constructions in Haida, Eyak, and Aleut. *International Journal of American Linguistics* 57 (2): 158–193.

——— (2010) The palatal series in Athabascan-Eyak-Tlingit, with an overview of the basic correspondences. In: Kari, James and Ben A. Potter (eds.), *The Dene-Yeniseian connection: Anthropological Papers of the University of Alaska*, New Series, Numbers 1–2: 168–193. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.

Liapnunova, Roza G. / Shelest, Jerry (trans.) (1996) *Essays on the ethnography of the Aleuts: At the end of the eighteenth and the first half of the nineteenth century*. Fairbanks: University of Alaska Press.

宮岡伯人 (1988)「エスキモー・アリュート語族」，亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典 第 1 巻 世界言語編㊤』: 910–913，東京：三省堂.

——— (1992a)「北米インディアン諸語」，亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典 第 3 巻 世界言語編㊦-1』: 1004–1078，東京：三省堂.

———(1992b)「環北太平洋の言語」，宮岡伯人（編）『北の言語 : 類型と歴史』: 3–65，東京：三省堂.

Nichols, Johanna (2025) Founder effects identify languages of the earliest Americans. *American Journal of Biological Anthropology* 186 (1), e24923. https://doi.org/10.1002/ajpa.24923

Nichols, Johanna and David A. Peterson (1996) The Amerind personal pronouns. *Language* 72 (2): 336–371.

Ross, Malcom (2003) Diagnosing prehistoric language contact. In: Hickey, Ramond (ed.), *Motives for language change*: 174–198. Cambridge: Cambridge University Press.

Sadock, Jerrold M. (2000) Aleut number agreement. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 25: 121–138. Berkeley: University of California.

Sapir, Edward (1915) The Na-dene languages, a preliminary report. *American Anthropologist* 17. Reprinted in: Victor Golla (vol. ed.) (1991) *The collected works of Edward Sapir VI: American Indian languages 2*: 105–131. Berlin: Mouton de Gruyter.

Sherzer, Joel (1976) *An areal-typological study of American Indian languages north of Mexico*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.

Swanton, John (1905) *Haida texts and myths: Skidegate dialect*. (Bureau of American Ethnology, Bulletin 29), Washington, D. C.: Government Printing Office.

Thomason, Sarah G. (1983) Chinook Jargon in areal and historical context. *Language* 59 (4): 820–870.

——— (2014) The Pacific Northwest linguistic area: Historical perspectives. In: Bowern, Claire and Bethwyn Evans (eds.), *The Routledge handbook of historical linguistics*: 726–736. New York: Routledge.

——— (2023) Language contact and linguistic areas. In: Dagostino, Carmen, Marianne Mithun, and Keren Rice (eds.), *The languages and linguistics of Indigenous North America: A comprehensive guide*: 647–668. Berlin: Mouton de Gruyter.

Thompson, Lawrence C. and M. Dale Kinkade (1990) Languages. In: Suttles, Wayne (ed.), *Handbook of North American Indians, vol. 7: Northwest Coast*: 30–51. Washington, D. C.: Smithsonian Institution.

Veniaminov, Ivan / Black, Lydia and Richard Geoghegen (trans.) / Pierce, Richard (ed.) (1984) *Notes on the islands of the Unalaska district*. Kingston: Limestone.

Woodbury, Anthony C. (1984) Eskimo and Aleut languages. In: Damas, David (ed.), *Handbook of North American Indians, vol. 5: Arctic*: 49–63. Washington, D. C.: Smithsonian Institution.

Northern Northwest Coast Language Area and its Neighbours

Hirofumi HORI
(Shizuoka University)

Among the linguistically diverse and complexly distributed languages of the northwestern coast of North America, Leer (1991) argued that a group of northern languages, Aleut (Eskimo-Aleut), Haida (a language isolate), and Eyak (Na-Dene), exhibit a set of unusual grammatical phenomena that define what he terms the Northern Northwest Coast language area. The principal traits attested to this area include: (1) a lack or paucity of labial obstruents, (2) promiscuous number marking in third-person pronouns by verbal elements, and (3) a periphrastic possessive construction. Because Haida and Eyak share the first two traits, they are regarded as the core of this language area. The Tlingit and Athabaskan language families are peripherally related. Further south lies the Central Northwest language area, proposed by Beck (2000), which includes the Salishan, Wakashan, and Chimakuan families.

This paper provides an overview of the grammatical phenomena, particularly (2) and (3), that characterize the Northern Northwest Coast language area, drawing primarily on Leer (1991). It also investigates the historical background that contributed to the formation of this linguistic area and offers additional considerations regarding the relationship between the sociocultural characteristics of the Northwest Coast, linguistic contact, and possible routes of human migration into the North American continent.

（ほり・ひろふみ　jjhhori@shizuoka.ac.jp）